

## 『エドワード1世』における反グリゼルダ表象 －エリザベス女王へのオマージュ－

前原澄子  
(武庫川女子大学文学部英語文化学科)

### The Counter-image of the Patient Grissel in *Edward I* － An Homage to Queen Elizabeth I －

Sumiko Maehara

Department of English, School of Letters,  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

#### Abstract

The dramatic characterization of Queen Elinor in George Peele's *Edward I* has been highly controversial among critics. Unlike the historical accounts, the Queen cruelly murders the wife of the Lord Mayor of London, and confesses that she had an illicit affair with King Edward's brother, Edmund. Mary Axton suggests that such a distorted image of Elinor, who was a queen of Spanish origin, reflects the then counterargument against the justification of the succession of the Spanish Infanta, which is alleged in *Conference about the Next Succession to the Crown of England* printed in 1594. However, *Edward I* is not a real history play but a historical romance, as seen in the battle with Robin Hood in the Welsh scene. Moreover, Queen Elinor, who is an unruly wife, often disdains English wool and is proud of her foreign and expensive fabrics. This is the very counter-image of the patient Grissel, who is willing to obey her husband's tyrannical demands and wear anything he wants her to wear. The story of Grissel was very popular among Elizabethan audiences. Furthermore, according to several documents, Queen Elizabeth I was often associated with Grissel. It is therefore considered that the negative image of Queen Elinor was an indirect homage to Queen Elizabeth I.

#### 1. 王妃の歪曲された人物像

ジョージ・ピール(George Peele)の『エドワード1世、又の名は長脛王の名高い年代記』(*The Famous Chronicle of King Edward the First, Sirnamed Edward Longshankes*)と題された劇を、海軍大臣一座が1595年から翌年にかけて繰り返し上演したことをフィリップ・ヘンズロー(Philip Henslowe)は記録している<sup>1)</sup>。また、1598年にもエドワード王の衣装が一度ならず目録に挙げられていることから、この劇が当時人気を博したことが推測される。劇の本筋は、十字軍の遠征から帰ったエドワードがイングランドの王位を継承し、ウェイルズを征服するまでの出来事であるが、合間に登場する王妃レオノール(Elinor)の人物像の奇抜さが兼ねてから注目されてきた。王妃は残酷でプライドが高く、ロンドン市長の妻を蛇にかみ殺させるだけでなく、婚姻前夜に王の弟エドモンド(Edmund)と肉体関係を持ち、娘のジョアン(Joan)は修道僧との間にできた不義の子であることを告白して死を遂げる。なぜ、このような史実と異なる筋書きが創られたのだろうか。

1961年にテキストを編集したフランク・フック(Frank Hook)は、ト書きの不備や場面の不整合を仔

細に分析した結果、王妃の筋書きは加筆によるものと見なしている<sup>2)</sup>。確かに、当時のイングランドの反スペイン感情を考慮に入れると、スペイン出身の王妃レオノールの人物像が加筆で歪められたとしてもそれほど不思議ではない。しかしながら、王妃の不義の告白は、イングランドの王位継承の正当性を脅かす問題であり、そのような危険な要素を作者が敢えて劇に取り入れたことには、より深い意味があったものと思われる。ここで、劇が創作された1590年代に、処女王エリザベス(Queen Elizabeth I)の王位継承をめぐる秘密裡に幾つかの議論が交わされたことが想起される。なかでも、1594年に出版された『イングランドの次なる王位継承に関する忠告』(*Conference about the Next Succession to the Crowne of England*)は、スペイン王女がイングランドの王位を継承することの正当性を主張して物議を醸した。メアリー・アクストン(Mary Axton)は、この問題の書において、エドワード1世の弟エドモンドが、スペイン王女へ続くランカスター家の祖と見なされる点に注目し、劇におけるエドモンドとスペイン王妃の不義を、スペイン王女継承説に対する否定のメッセージと捉えている<sup>3)</sup>。もっとも、王妃が不義を告白する場面には、フランスから修道僧が呼ばれ、あたかも王妃の出身地がフランスであるかのような不整合が認められる。これは、ヘンリー2世(Henry II)の後エレオノール(Eleanor of Aquitaine)と混同されたものとこれまで解釈されてきたが<sup>4)</sup>、アクストンはこうした不整合を、王妃が聖史劇のイブ(Eve)のように不特定の王妃像を否定的に表象することの帰結と見なしている<sup>5)</sup>。

レオノール王妃の人物像に象徴性を見出すアクストンの見解は示唆に富む。そもそも、劇は一貫して空想的、非現実的であり、市長の妻を殺害した王妃は、神の裁きでチャリングクロスの上に沈み、ポターズヒルに浮かび上がる。エドワード王とウェイルズ王の戦いは、海軍大臣一座の得意とするロビンフッドの立ち回りで虚構化される。また、ウェイルズ王とエレナ(Elinor)の政略結婚は、劇では純愛物語に書きかえられており、作者が厳密に歴史劇を書くことを意図していなかったことは明らかであろう。これらの点を踏まえると、劇のテーマをスペイン王女継承説の否定に集約してしまうことには些か疑問の余地が残る。またアクストンは、レオノール王妃を聖史劇のイブに喩えるが、王妃の人物像はそれ以外にも、ある明確な特徴を示している。以下では、レオノール王妃の象徴する新たな一面を照射したい。

## 2. レオノール王妃とグリゼルダ

劇において、王妃のプライドの高さが衣服への言及を通して繰り返されることは注目に値する。エドワードの戴冠式の日取りを知らされた王妃は、スペインから仕立て屋を呼んで比類なき豪華な衣装を作らせるために、戴冠式を延期して欲しいと王に懇願する。

レオノール王妃。 今年の12月14日に戴冠式をするのですか。  
まあ、あなた、それにはあまりにも時間がないし  
急ですわ、それほど立派で厳かな式を行うには、  
準備に取りかかるのに1年あっても足りないでしょう、  
仕立て屋、刺繍職人、凝った意匠を施す者が  
立派な身分にふさわしい衣装を用意するには、  
あなたの可愛いネッドの言うことを聞いて下さい。何とか考えますから、  
20週でどのような衣装を着るべきかを。  
お願いです、戴冠式を春まで延ばして下さい、  
私たちの衣装に十分な工夫を施すことができるように。  
スペインから仕立て屋を呼ぶつもりです、  
そうすれば素晴らしいスーツを作ってくれるでしょう。

(196-207)<sup>6)</sup>

この訴えには、王妃がイングランド製の衣服には満足できないことが示されている。また、王妃の衣

服に対するこだわりは、ウェイルズで王子を出産した場面にも認められる。出産の祝いにウェイルズの家臣からフリーズのマントが届けられると、そのような粗末な布地を王子に着せることは不当であると、王妃はエドワードに訴える。

レオノール王妃． フリーズのマントだなんて、あらまあ、お願いよ、  
もうこんなことには耐えられないわ。ねえ、あなた、  
これがこの国の知恵と友情なのですか。まあ、ありがたいこと。  
もし、ウェイルズの知恵と礼儀が、  
王子にフリーズのマントを着せることだとしたら、  
私がこの子にふさわしいマントを用意しています。  
それを着たら、この子はきっと太陽のように輝き、  
この子が通る道には芳香が立ち込めるでしょう。

(1596-1602)

フリーズとは、ウェイルズやイングランドの中部地方で生産される粗紡の毛織物であり、王妃はここでもイングランド製の衣服への不満を明らかにしている。また、王妃がイングランド製の毛織物を見下す発言はこれだけではない。王妃は、「ウェイルズの地はあまりにも卑しく、自ら歩くのにふさわしくない」(“the ground is al too base, / for Elinor to honor with her stepes:”) (1031-32)とグロスター伯に述べる際に、エルサレムを歩いた自らの足場を高価なアラス織りや絹の布地に喩える一方で、「英国製の毛織物は、愛用の白馬が誇らしげに踏みつけるのにふさわしい」(“My milke white steed treading on cloth of ray, / And trampling proudly underneath the feete, / Choise of our English wollen drapery.”) (1037-39)と述べている。

また、こうした王妃の自己主張は、衣服のメタファーにとどまらず、行動によっても明らかにされる。意に反してエドワードからウェイルズに呼び寄せられると、王妃は見舞いに来たエドワードに不機嫌をあらわにし、身重の体で王に拳で一撃を与えることを望む。

長脛王． こちらへおいで、ジョウン。  
王妃がどうして苛立っているのかお前は知っているか。  
ジョウン． いいえ、私にはわかりませんが、  
お父さまをどうしても一打ちなさりたいようです。

(1123-26)

そして王妃は、「力強いイングランド王がレオノールの拳で卑しく一撃を受けた」(“mighty England hath felt her fist: / Taken a blow basely at Elinors hand.”) (1140-41)ことを得意げに話すのである。このように、王妃は国王を打撃することさえ憚らない「じゃじゃ馬」であるが、こうした自己主張の記号として、とりわけ「贅沢な衣服」が選ばれたのはなぜだろうか。

ここで、かの有名なグリゼルダ(Griselda)の物語が、衣服と深い関わりを持つことを思い出してみたい。貧しい娘グリゼルダは侯爵に求婚され、輿入れ前にみすぼらしい衣服を脱いで侯爵の用意した豪華な衣装に着替えることを命じられる。持参金も持たずに侯爵夫人となったグリゼルダは、従順と貞節を貫き、夫の無理難題に耐え忍ぶが、離縁を申し渡されると、今度は夫の所有物である高価な衣服をその場で脱ぎ、ガウン一枚をまとって実家に帰り、再び貧しい衣服を身につける。ボッカチオ(Giovanni Boccaccio)からペトラルカ(Francesco Petrarca)を経て、チョーサー(Geoffrey Chaucer)の『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*)に「学僧の話」(“The Clerk’s Tale”)として収録されたこの物語は、1593年にトマス・デローニ(Thomas Deloney)の編集した『楽しいバラッド集』(*The Garland of Good Will*)にも収録されており、当時この物語が人口に膾炙したものであったことは疑いない<sup>7)</sup>。一方、レオノール王妃は、十字軍から帰還した兵士に施してあまり有る巨額の持参金を持ち、イングランド王エドワードの後となっても、イン

グランド製の布地を見下し、スペイン製の贅沢な衣服を誇りにする。当時の観客にとって、レオノール王妃は、まさにグリゼルダのパロディーとして認識されたのではないだろうか。実際に、エリザベス朝末期にグリゼルダの書き換えが流行したことは、デローニの散文『レディングのトマス』(Thomas of Reading)のマーガレット(Margaret)や、何より『エドワード1世』を演じた海軍大臣一座が、1600年に『忍耐強いグリシルの楽しい喜劇』(The Pleasant Comodie of Patient Grissill)を上演していることに裏づけられる。

『忍耐強いグリシルの楽しい喜劇』には、3人の女性が登場する。耐えるグリシル(Grissill)、じゃじゃ馬のグエンシアン(Gwenethyan)と、独身を貫くジュリア(Julia)である。そして興味深いことに、この劇のグリシルも布地へのこだわりを明らかにする。離縁を言い渡されたグリシルは、「嘆くことはないわ。絹の衣服は剥ぎ取られて、粗紡の灰色のガウンを着たら今よりも豊かに思えるだろうから」(“Mourne not because these silkes are tane away, / You’le seeme more rich in a course gowne of gray.”) (3. 1. 48-49)<sup>8)</sup>と自らを慰める。この「灰色のガウン」は、続く侯爵のせりふで、「粗紡の毛織りのガウン」(“this russet gowne”)であることが明らかにされる。侯爵は、そのガウンを貧困の象徴として吊り下げて家来に見せるのである<sup>9)</sup>。この粗紡の毛織物に精神的豊かさを見出すグリシルは、それを見下すレオノール王妃とまさに好対照をなしている。それにしても、チョーサーの「学僧の物語」では、貧しいグリゼルダの衣服が毛織物であるとは述べられていない。それにもかかわらず、『忍耐強いグリシルの楽しい喜劇』では粗紡の毛織物がクローズアップされることには、どのような意味があるのだろうか。

1592年に出版された、ロバート・グリーン(Robert Greene)の『成り上がり宮廷人への警句』(A Quip for an Upstart Courtier)は、イタリア製のベルベットの布地とイングランド製の質素な布地を疑似討論させる形で世相を諷刺し、17世紀の中葉まで版を重ねてベストセラーとなった。この討論の最終判決では、次のように述べられている。

イングランド製の質素な布地は、古代ブリテン島にブルートが住み始めてから何百年もの間、人々に着用されてきた。国王、貴族、紳士、ヨーマン、貧民に施す者、真の臣下、屋敷を切り盛りする者、そして一般庶民に着用されてきたのである。それゆえ、由緒正しく公正なものである。一方、イタリア製のベルベットの成り上がり者で、プライドから生まれ、自惚れによって育てられ、この国に最新の流行をもたらした。しかしながら、近頃では家賃を上げる元となり、この国の敵である。したがって、ベルベットの成り上がり者は、イングランド製の布地の公明さには決して匹敵しない<sup>10)</sup>。

これは、質素儉約を尊び、慈善や施しを美德としてきたイングランドの古き良き習慣が、大陸から伝わる華やかな文化風習に毒される危険性を、布地のメタファーを用いて諷刺したものと言えるだろう。そしてこうした言説は、先述したレオノール王妃とグリゼルダの対比をまさに連想させるものである。

実際に、当時の貿易政策によって外国製の布地が驚くべき速さでロンドンに流通したことは、様々な出版物に垣間見ることができる<sup>11)</sup>。たとえば、ジョン・リリー(John Lyly)の『マイダス王』(Midas)のプロローグでは、「大陸との行き来や貿易が盛んになり、ありとあらゆる国の特徴が、我が国[イングランド]のそれに編みこまれ、この国は多種多様な糸で巧みを凝らして織り上げられたアラス織りのようだ」(“Traffic and travel / hath woven the nature of all nations into ours, and made this / land like arras, full of device, which was broadcloth, full of / workmanship.”) (Prologue 13-16)と述べられている。

また、ピューリタン作家で名高いフィリップ・スタブズ(Philip Stubbes)は、『悪弊の解剖』(The Anatomie of Abuses)において、もの珍しさから外国製の衣服を着ることをプライドの象徴として批判するのみならず、外国製品の過剰な消費が国内産業を衰退させ、諸外国に富を与えることに警鐘を鳴らしている。

そのうえ、これらの国々はひとりで豊かである。あらゆる種類の貴重な繊維が豊富に手に入

るのだから。たとえば、絹、ベルベット、サテン、ダマスカス、サースネット、タフタ、らくだ織など(これらはすべて外国で生産される)。だからこそ、彼らはそれを着用しても咎められる筋合いはない。彼らには他に着るべきものがないのだから。だから、私たちが国内でそうした衣服を生産できるのなら、それらを喜んで着てもある程度許容できる。しかしながら、私たちはあまりにも見せびらかすことに捉われて、外国製でないと価値がないと思っている。そして、私たちは必要もないのに楽しむために、つまらない外国製の服を買い、自国の経済を衰退させ、諸外国を豊かにしている。外国人は陰で笑っている。私たちがひどく愚かに価値のないものを好み、彼らの衣服に肩を持つありさまを<sup>13)</sup>。

以上のように、イングランド製の布地と外国製の布地の対比は、当時さまざまな書物で取り上げられた流行のモチーフであったことが明らかである。海軍大臣一座の両劇において、外国製の衣服を好むレオノール王妃と粗紡の毛織物に豊かさを見出すグリシルは、まさに表裏一体であったと考えられるのである。

### 3. エリザベス女王とグリゼルダ

エリザベス女王がしばしばグリゼルダに喩えられたことは、興味深い事実である。ジョン・フィリップ(John Phillip)の『忍耐強いグリシルの劇』(*The Play of Patient Grissell*)は、1565年と1568年にそれぞれ書籍出版業組合の記録に登録されているが、劇が執筆されたのは、おそらく女王の結婚問題がもっとも活発に議論された1560年頃であろうと推定されている。『忍耐強いグリシルの劇』が終わると、締め口上役(The last speaker)が登場し、女王へ向かって国家の安寧を願うメッセージが述べられる<sup>14)</sup>。ちょうど同じ頃に書かれた悲劇『ゴブダック』(*Gorbuduc*)が、王位継承者の不在が国家に危機をもたらすことを暗に示すのと同様に、フィリップの『グリシル』は、女性君主が結婚して嫡子を残すことの重要性を間接的に唱えたものと考えられる<sup>15)</sup>。また、女王とグリゼルダの関連性を示す例はこれだけではない。1566年の議会におけるエリザベスの答弁には、自身をグリゼルダに喩える興味深い発言が見られる。

私は死ぬことを恐れていない。人はみな死す運命にあるのだから。私は女であるが、私の父がそうであったのと同じように、私の立場にふさわしい勇気を十分に持っている。私は塗油によって選ばれた女王である。私は暴力的行為で何かを為すように強えられることは決してない。私は神に感謝する。たとえペチコートを身にまとってこの国から追われたとしても、私はどのキリスト教国でも生きていける能力を与えられたことを<sup>16)</sup>。

エリザベスは、無力なグリゼルダと自身を対比して、女性であっても力強い君主たり得ることを議会で強調したのである。また、エリザベスとグリゼルダを結ぶイメージが長い周期で流通したことは、1630年に出版されたチャップブック、『忍耐強いグリシルの楽しく美しい歴史』(*The Pleasant and Sweet History of Patient Grissell*)の口絵に、エリザベス女王の木版画が使用されていることにも窺える<sup>17)</sup>。

エリザベス女王とグリゼルダを結びつけるもっとも興味深い書は、1601年にトマス・エジャトン(Thomas Egerton)に献呈された、『イングランドの守護聖人ジョージー寓意的記述』(*St. George for England: Allegorically Described*)である。時の経済ジャーナリスト、ジェラッド・マリーン(Gerard Malynes)は、外国製品の過剰な輸入で貨幣価値が下落した当時のイングランドを、恐ろしい竜に襲われた処女に喩え、今こそイングランドの守護聖人ジョージの助けが必要であることを寓意的に説いている。この「処女」が、エリザベス女王の身体/国家を意味することは述べるまでもない<sup>18)</sup>。著者は、ありとあらゆる悲劇のヒロインを引き合いに出した結びにグリゼルダの物語を再現し、女王エリザベスの忍耐は、グリゼルダのそれをはるかに上回るものであると述べている。

(前原)

もしグリゼルダが称賛に値し、忍耐の名を得るとしたら、というのも彼女はサルツォの侯爵によって貧しい家から連れ出されて侯爵夫人となったが、結婚したら侯爵は妻を試し、離縁して、別の女性と結婚するふりをし、その女性は(誰なのかを彼女は知らされていなかった)グリゼルダと侯爵の間に生まれた娘であり、離縁の際にグリゼルダはすべての衣服を取り上げられたのだ。(私は言う)もし、グリゼルダがこれらすべてを忍耐したことで名声を与えられたのなら、これらとは比べようもない程にもっと大きな忍耐をされているのは、この類まれなる処女であり、永遠に人々の記憶に留められるべきである。彼女はその地位に与えられたすべての特権や快樂を投げ出し、この残酷な化け物に身体を晒される苦しみに遭われているのだから<sup>19)</sup>。

女王の結婚問題が浮上した1560年代のグリゼルダ表象と異なり、ここでは大陸の文化に浸食されるイングランドのイメージが、グリゼルダの名を借りてエリザベスに重ねられていることは興味深い。豪華な外国製の衣装を身にまとい、イングランド製の毛織物を見下すレオノーラは、エリザベスの美德と忍耐をまさに逆から照らし出す工夫であり、エリザベス女王に対する間接的な称賛(homage)であったと考えられるのである。

#### 4. 結 論

このように、『エドワード1世』に登場するレオノーラ王妃は、ピールの機知と空想が遺憾なく発揮された、いわば架空の王妃であったと言える。しかしながら、幕切れに至って、王妃は劇の本筋を左右する重要な証言を残す。娘のジョウンは不義の子であるが、ウェイルズで生まれたばかりの王子は紛れもなくエドワード王の嫡子であるという告白である。この証言は、エドワード2世の王位継承権を正当化する点において、劇において重要な意味を持つ。

エドワード2世は、クリストファー・マーロー(Christopher Marlowe)の劇に見られるように、君主として負の側面を持つ一方で、エリザベス朝には、ウェイルズに生まれたウェイルズの王として神話化された事実は注目に値する。1584年にサー・フィリップ・シドニー(Sir Philip Sidney)に献呈された『ウェイルズの歴史』(*The Historie of Cambria*)は、デイビッド・パウエル(David Powel)によって初めて英語で書かれたウェイルズの歴史書である。この書には、ブリテン島が3つに分割されて、イングランドとスコットランドとウェイルズが誕生したことを前置きに、本論ではブリテン王カドワラダー(Cadwaladar)から、エドワード1世が征服したウェイルズ王リュウエリン(Lhwelyn)までの歴史が綴られている。注目すべきは、それに続いて新たな章が設けられ、ウェイルズの王エドワード2世の戴冠からエリザベス女王に至るまでの、イングランドの血を引くウェイルズ王の歴史が記述されていることである<sup>20)</sup>。もとより、チューダ家はウェイルズに起源を持つことから、時の女王エリザベスをウェイルズの歴史に位置づけるために、エドワード2世を初のウェイルズ王とする神話的記述が作られたものと考えられる。以下は、エドワード2世の誕生を記した部分である。

エドワード王は、ウェイルズを征服した。[...]しかし、ウェイルズ人の信頼を得て王として受け入れられることは決してなかった。[...]それゆえ、王はイングランドからレオノーラ王妃をカーナーボン城に呼び寄せ、真冬のことであったが、王子を出産させた。そして王妃がベッドに戻ることができるようになると、王はルースランに行ってウェイルズ中の貴族たちを呼び集め、彼らの国家についての相談があると述べた。王は彼らウェイルズ人に宣言した。[...]ウェイルズで生まれた王子に名前をつけたい。王子は決して英語を話すことはない。王子の身体も言葉も決してウェイルズ人を汚すことができないように。そして集まったウェイルズの人々はすべて、王子に従うことを認めた。王はカーナーボン城で生まれた息子をエドワードと名付けた<sup>21)</sup>。

しかしながら史実によると、エドワード2世が生まれた時には嫡子のアルフォンソー (Alphonso) がまだ生きており、エドワード2世が、ウェイルズの王となるべくウェイルズで誕生したというのは、後世のフィクションに他ならない。

ピールの『エドワード1世』においても、劇の冒頭で王子が亡くなったことが告げられ、エドワード1世には嫡子のないまま劇が進行する。そして、エドワード王は、ウェイルズに生まれた者しか王として認められないために、身重の王妃をウェイルズに呼び寄せて王子を出産させる。王子が生まれると、国中が祝福して、「ウェイルズ王」の称号が与えられる。また、劇には予言者が登場し、エドワード2世の誕生をブルートの生まれ変わりとして述べて神格化している。こうした劇の筋書きは、まさに『ウェイルズの歴史』を材源としたものであり、エドワード2世を神話化するものであったと考えられる。しかしそれだけに、幕切れにおける王妃の不義の告白は意味深長である。エドワード2世の王位継承権は、王妃の不義の疑惑からかろうじて正当化されるのである。しかしながら、完全無欠の王位継承の系譜など存在しなかったこともまた歴史上の事実である。チューダ朝の最後の君主となったエリザベスも、ヘンリー8世 (Henry VIII) の非嫡出子という見方によって、晩年に至るまで王位継承権をめぐる議論が尽きなかったことを踏まえると、こうした劇の結末にも、忍耐の女王エリザベスへのオマージュを読み取ることができる。

### (注)

- 1) Foakes, R. A., ed. *Henslowe's Diary*, Second Edition, Cambridge University Press, Cambridge, 2002, pp.20-48.
- 2) Frank S. Hook, ed. *The Dramatic Works of George Peele*, vol.2, Yale University Press, New Haven, 1961, pp.23-37.
- 3) Axton, Marie, *The Queen's Two Bodies: Drama and the Elizabethan Succession*, Royal Historical Society, London, 1977, pp.91-94.
- 4) レオノール王妃の筋書きは、カスティリヤのレオノール王妃とアキテーヌのエレオノール王妃をそれぞれ題材にした二つのバラッドに復元されているが、これらを劇の材源と見なす説もある。詳細は以下を参照。  
Hook, Frank S., "The Ballad Sources of Peele's *Edward I*." *Notes and Queries* 3: 1 (1956), pp. 3-5.  
Norgaard, Holger, "Peele's *Edward I* and Two Queen Elinor Ballads." *English Studies* 45 (1964), pp. 165-168.  
Carney, Elizabeth, "Fact and Fiction in *Queen Eleanor's Confession*." *Floklöre* 95: 2 (1984), pp.167-170.
- 5) Axton, Mary, *op.cit.*, pp.101-102.
- 6) Peele, *Edward I*, in *The Dramatic Works of George Peele*, vol.2, ed. by Frank S. Hook. 以下、テキストからの引用はすべてこの版による。
- 7) Mann, Francis Oscar, ed. *The Works of Thomas Deloney*, Clarendon Press, Oxford, 1912.
- 8) Dekker, Thomas, *The Pleasant Comedy of Patient Grissil*, in *The Dramatic Works of Thomas Dekker*, vol.1, ed. by Fredson Bowers, Cambridge University Press, Cambridge, 1953.
- 9) Jones, Ann Rosalind & Peter Stallybrass, eds. *Renaissance Clothing and the Materials of Memory*, Cambridge University Press, Cambridge, 2000, pp.228-232.
- 10) Greene, Robert, *A Quip for an Vpstart Courtier: or, A Quaint Dispute between Veluet Breeches and Cloth-breeches*, in *The Life and Complete Works in Prose and Verse of Robert Greene*. vol.11, ed. by Alexander B. Grosart, Russell & Russell, New York, 1964, p.294.
- 11) Collins, Fort, "Treasonous Textiles: Foreign Cloth and the Construction of Englishness." *Journal of Medieval and Early Modern Studies* 32:3 (2002), pp.543-570.
- 12) Lyly, John. *Midas*, ed. by David Bevington, Manchester University Press, Manchester, 2000.
- 13) Stubbes, Philip, *The Anatomy of Abuses*, ed. by Margaret Jane Kidnie, *Medieval and Renaissance Texts and Studies*, vol.245, Arizona State University Press, Tempe, 2002, pp.69-70.
- 14) Phillip, John, *The Play of Patient Grissell*, eds. by W. W. Greg & Ronald B. McKerrow, Malone Society Publication, Oxford, 1909, 2093-2120.

(前原)

- 15) Wright, Louis B, "Notes and Observations: A Political Reflection in Phillip's *Patient Grissell*." *Review of English Studies*, 4:16 (1928), pp. 424-428.
- 16) Hartley, T. E., *Proceedings in the Parliaments of Elizabeth I*, vol.1 1558-1581. Leicester University Press, Leicester, 1981, p. 148.
- 17) Jones, Ann Rosalind & Peter Stallybrass, eds. *op.cit.*, pp.240-241.
- 18) Harris, Jonathan Gil, *Sick Economies: Drama, Mercantilism, and Disease in Shakespeare's England*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 2004, pp.57-59.
- 19) Malynes, Gerrard, *Saint George for England, Allegorically Described*, William Tymme, London, 1601, STC 17226a, pp. 54-55.
- 20) Powel, David, *The Historie of Cambria*, ed. by Caradoc of Llancarfan, *Theatrum Orbis Terrarum*, Amsterdam, 1969, pp.376-399.
- 21) *Ibid.*, pp. 376-377.

\*本稿は、第47回シェイクスピア学会(2008年10月、於岩手県立大学)における口頭発表に大幅な加筆・修正を施したものである。

受稿日 2014年9月12日 受理日 2014年11月20日